

メッセージ

高岡 啓次郎

アイヌの家に生まれ育った民雄は、町の高台に住むユリ子が好きだったのに思いを伝えることができなかった。父親が大きな漆器工場の社長をしているユリ子の家に遊びに来るのは、どの子も金持ちの両親を持つていた。民雄は父親が庭師をしていたので何度かついて行ったことがあるがいつも遠くからユリ子の姿を見つめるだけだった。

民雄は小学生なのに背が飛び抜けて大きく、それがいやなので背中を丸める癖があった。その様子がどこか自信のないオドオドした感じを与えるので、クラスメートたちは余計に彼をからかったりバカにしたりのだった。

北海道から嫁いできた母親は民雄が赤ん坊のときに病気で亡くなったので、父親が民雄と二人の弟たちを育ててくれた。酒を飲んでは大声で怒鳴ったりわめいたりする父親を民雄は好きでなかったが、仕事をしている様子を見るのは嫌いでなかった。その時間だけが父親を尊敬していられるときだった。

いつものように屋敷の芝を父親が刈っていたとき、民雄は少し手伝ったあと建物を囲む長い塀の周りを退屈しながら歩いていた。そのとき、少し離れた坂道でユリ子が慣れないしぐさで自転車を押して歩いていた。白い半袖シャツに赤いフリースカートをはいたユリ子は大人びて見える。長い髪が風になびいていて、やわらかな陽ざしを受けた形のいい横顔がくつきりと空に映えている。その様子を民雄は大きな桜の木陰からうっとりとした眼差しで見つめていた。ユリ子はおそらく自転車を買って間もないのだろうか、恐る恐る乗りはじめたが、ふらついて見るからに不慣れた様子だった。間もなくユリ子の姿は視界から消えたが、民雄は彼女の姿を追うようにゆっくりと土手に上がった。天王川の瀬音が急に騒がしくなり、夏の終わりを上げる虫たちが哀しげに鳴いている。

民雄は土手に腰かけ、川の流れをやるせない想いで見つめながらため息をつき、右手にふれた小石を投げた。

そのすぐあと、瀬音でも虫でもない音がした。土手の下方からかすかな泣き声が聞こえてきたのだ。そこには背の高い葎やイタドリが群生していたが、民雄が覗きこむと藪の中から赤いスカートが見えた。泣いていたのはユリ子だったのだ。急いで下りると傍に自転車が転がっていて、ユリ子の白い膝から赤い血が出ていた。

「そこから落ちたのか？」

「うん」と答えたユリ子は痛そうに足を押さえ、大きな目から涙をポロポロ流しながらうなずくだけだった。民雄は近くに生えていたヨモギの葉を一枚もいでユリ子の膝をこすってあげた。

「こうすると血が止まるし、じきに痛くなくなるよ」

青い汁がユリ子の血に混じって膝がしらが茶色になった。黙ってされるままにユリ子は民雄をじっと見つめていた。

「どうだい、まだ痛いかい？」

「うん少し。でもさつきより良くなったみたい」

「そうだね。これが一番きくんだぞ。父さんが教えてくれたんだ」

「ここも痛い」

ユリ子は袖をめくり、左手のひじにできたすり傷を民雄に見せた。同じようにヨモギを塗ってくれという意味のようだ。民雄はもう一枚ヨモギの葉をもいで塗ってあげた。これでもう大丈夫だね、と言ってユリ子は笑顔で立ち上がり、アリガトと恥ずかしそうに言った。民雄は頭をかきながら、なんもだと答えたが心臓が激しく音をたてていた。

そのあと、力持ちの民雄はいとも簡単に自転車を脇に抱えて土手の上に運んだ。ユリ子はスカートについた草と土を手ではらい落としてから、民雄が恥ずかしくなるほど何回も礼を言って自転車を押しながら家に帰って行った。

それからというもの、ユリ子はしばしば民雄に近づいて

話しかけるようになった。それが楽しみなので民雄はお父さんに「こんどはいつお屋敷に仕事に行くのか」と、ついききたくなるのだった。だが、春から初夏にかけては三日おきに庭の手入れに行っていた父親も夏の盛りを過ぎるとたまにしか行かなくなった。

しかしユリ子は民雄のことを忘れていなかった。あれから花模様のきれいな封筒に入れた手紙がくる。屋敷で開かれる誕生日の祝いや菊の節句など、ときどき催される集いに必ずといっていいほど民雄を招待してくれたのだ。

手紙の最後には「民雄ちゃんが来てくれないと私は泣いちやうから」と書いて、子豚が涙を流している漫画が添えられていた。ことわりきれいなまま何度か出席した民雄だったが、飾りつけられた大きな部屋には、上等そうな服を着た大人や子どもばかりで、なんだか自分がいるのが場違いのような気がした。

民雄が誰とも満足に話せないまま、部屋の片隅で背中を丸めていると、「さあ、どれでも好きなのをとってね。そうしないとあそこにいる行儀の悪い男の子たちに全部食べられてしまうから」と言ってユリ子が食べ物やおやつを持ってきて、民雄が淋しく感じないように何かしら楽しいことを話しかけてくれるのだった。

翌年の春、民雄は小学校を卒業してから同じ町にある左官屋に住み込みで奉公に入った。だが、ユリ子は東京の女

学校に入るために地元を去ってしまった。そのときの喪失感、食事がまともできないほどひどいものだったが、元氣のない民雄の心の中を周りの誰もが気づかないようだった。

学校でもそうだったが、貧しいアイヌの息子である民雄は職場でさらに激しいイジメに遭った。仕事の覚えが悪いと言っては殴られ、返事が遅いと言っては蹴られ、顔つきが気に入らないと言っては砂をかけられた。一度は先輩たちが結託して三時間も腰までセメントに閉じ込められたことがある。

親方やおかみさんは、そんな様子を知りながら見て見ないふりをしていた。職場では柴犬がなついてくるだけで誰も彼に優しくしてくれる者はいなかった。民雄は早く兵隊さんにでもなつて手柄をたてたいと思った。そうすれば誰もバカにしないだろう。しかし、このころはまだ一部の若者しか兵隊になれなかった。

働いて得たお金を届けると、父親は最初のころは上機嫌だったが、やがて金額に不満をもらし酒にまかせて暴力をふるった。左官屋の屋根裏にある暗い部屋のうすよごれたフトンの中で声をおさえて泣いたことは数知れない。民雄は何度も死にたくなつた。そんなとき思い出すのはユリ子が自分に示してくれた優しさだった。それだけが民雄の心に残る宝物だった。

ユリ子は昔と変わらない親しみをこめて民雄の日焼けした大きな腕にほっそりとした白い手をからませてきた。視線を合わせるのも恥ずかしいほどユリ子は美しい婦人になつていった。

ユリ子は何かにつけて話をしたが、民雄はさつさと立ってモルタルを練り始めた。しかし仕事をしていてもユリ子のが気がなつてしかたがない。お屋敷を囲っている塀は百メートル以上もある。真面目にしなければ約束の期日までに終わらせることができなくなってしまう。天目山に陽が沈みかけても、民雄は真剣に仕事に励んだ。

約束の三日目も終わろうとしていた。あれからユリ子は何かの用事で再び東京に行っているようだった。こんどはいつお屋敷に来られるだろう。同じ町に住んでいても簡単に顔を見られないのは分かつていた。最後のモルタルを練りながら民雄はじつと灰色の渦を睨みつけていた。自分の腕に屈託なく巻きつけてきた白い手。小学生のときヨモギを塗ってあげた小さな手を思い出していった。

彼は昔と同じようなため息をつきながら、塀の最後の部分に立ち、少し前に終わつていた下塗りの上に金ゴテで「命のユリ」と刻み付けた。辺りはすでに薄暗く、遠くにある寺の鐘が余韻を引いて鳴っていた。その音を六つ聴いたあと、刻んだ文字を指でなぞつてから上をモルタルでおおった。

やがて民雄はさらに立派な体格に成長し、細身の体にくましい筋肉がつき、腕のいい左官職人になった。そのころは古い職人がひとりふたりと店を去り、やつと彼をバカにするものはいなくなつた。屋根裏部屋を出て家から職場に通うようになっていたが、父親は民雄のかせぎを当てにして仕事もせずに酒におぼれた。

そんなある日、勤めている左官屋に高台の屋敷から塀の修理を依頼してきた。そこは数年前から空き家になっていたのだが、お屋敷のお嬢さんが帰ってきて住むのだと親方は言った。

十年ぶりで行った家にはユリ子が大学で助教授をしているという婿を迎えて家を継いでいた。民雄は心臓の音が喉まであがつてきて、暑くもないのに背中にひどく汗をかいてしまった。屋敷の裏玄関から入ると依頼主が出てきた。立ちつくしている民雄を見てユリ子は叫んだ。

「まあ、あなた民雄ちゃんでしょう。そうよね？」

民雄は無言のままうなずいた。

「まあまあ懐かしい。すぐ分かつたわ。ずいぶん背が伸びたけれど、お顔が変わらない。いいえ、とても凛々しくなつた。お元気だったの？」

「はい、元気です」

「嬉しいわ。さあ、こちらへきてあれからのことを話してちょうだい」

長い年月が過ぎたとき、町に悪い感冒がはやつた。世界中に流行したスペイン風邪は町でも何百人もの命を奪つたが、強健だった民雄の家族さえ例外ではなかった。父親が死に、それから間もなく民雄は三十二歳の若さで亡くなつてしまった。

そのとき地域を地震が襲い、あちこちの建物に被害をもたらした。ユリ子が住む高台の屋敷の塀も一部が崩れ落ちた。その壁から『命のユリ』という文字が浮かびあがっていたのをユリ子の子どもが見つけたとき、民雄はすでに火葬場の煙になつていった。

了

